

字法なるものも附加されてゐる。

尙附録として各省區面積表、鐵路里程表がついてゐる。地圖の編纂は修史事業と一脈相類する處あり、一國文化の消長を知るべき一つの指標と考ふる事ができるが東洋の先進國を以て任する我國にこの新地圖に優る程の大地圖帳の完成せられん事を希望して止まない。(米倉)

●東洋文明史論叢

桑原 隲 藏著

この書は桑原博士遺作集の第二部に當り、博士の數ある論文
中支那文化及び東西兩文化の交渉に關するもの左の十三篇を
擇んで收載せられてゐる。

歷史上より見たる南北支那

紙の歴史

經子に見えたる宋人

支那人間に於ける食人肉の風習

唐宋時代の銅錢

長安の青龍寺の遺趾に就て

司馬遷の生年に關する一新説

隋唐時代に支那に來住した西域人に就て

明の龐天壽より羅馬法皇に送呈せし文書

創建清眞寺碑

支那人を指すタウカス又はタムガシといふ稱呼に就て

支那の記録に見えたるイスラム教徒の猪肉食用禁制

新發見のカトリック教の宗論關係の二史料

論文各篇は何れも博士生前數種の學術雜誌上に發表せられて、學界の舉つて重んずる處となり、現在に於ても東洋學研究者の必讀、常に參考とすべきものとされてゐるもののみであるから、今更茲にその個々の内容紹介を贅する必要があるまい。尙卷頭には博士壯年時代の寫眞及び羽田博士の序文があり、卷末に索引が附されてゐる。

(京都弘文堂、五一七頁・價三・八〇)(内田)

●渤海國志長編 二十卷

編者金毓紱氏は現今奉天公署參事官にして奉天の國立圖書館副館長を兼任、滿洲國屈指の學者として令名高き人。本編は氏が遍く日支鮮の史籍を涉獵し、北は吉林・黑龍江二省に走り、東は朝鮮半島を極め數年間腐心研鑽の末先頭上梓の運びとなりしものである。渤海國志長編なる書名は氏は満足はさせなかつたが最初に氏を刺戟誘掖する所ありし唐晏の渤海國志に負ひ、李燾の續資治通鑑長編に倣つて長編と附加せしものといふ。その體裁は

卷一總略上、卷二總略下、卷三世紀、卷四後紀、卷五年表、卷六世系、卷七大事表、卷八屬部表、卷九宗臣列傳、卷十諸臣列傳、卷十一士庶列傳、卷十二屬部列傳、卷十三遺裔列傳、卷十四地理、卷十五職官考、卷十六族俗考、卷十七食貨考、卷十八文徵、卷十九叢考、卷二十餘錄、より成り別に附圖二幅を添えてゐる。その引用書目は一百三十餘種を算へ、その列傳所收

の人物は二百五十八に及び、氏自ら「本編所叙乃至四百餘年甞明始末備於一編題曰渤海國志實渤海民族志也」と些か自負して居るが如く渤海民族興廢の迹を窺ふべき文獻上の一大集成たるを失はぬ。本編の含む内容は極めて豊富で論すべき事も多いが、今は從來問題となれる二三の點に就て氏が如何なる論定をなして居るかを記して全豹を推すにとゞめたい。

先づ渤海建國の始祖に就ての問題である。長編(卷三世紀第一)に「渤海高王名祚榮、姓大氏、靺鞨粟末部人、乞乞仲象之子也、或云高麗別種」とあり、新唐書の記事に從つて始祖祚榮を乞乞仲象の子なりとして居る。この兩人の關係を新唐書に從つて父子とみるべきか否やに就ては異論あり。池内博士は仲象・祚榮は同一人、仲象は建國前營州在住中の名、大祚榮は建國後の名なりと斷じ(東洋學報第五卷第一號、渤海の建國者について)、津田博士亦之に從つた(滿鮮地理歴史研究報告、第一卷渤海考)。鳥山氏は之に從はず祚榮は仲象の死後靺鞨軍を統御した他の首領ならんと推測して居る(渤海史考)。金氏は長編卷十九叢考(七葉)に於て「此說別無顯證」として祚榮・仲象同一人に說に賛せず、五代會要が新唐書と同じく父子說を記せるを重視して之に左袒して居る。然るに仲象を祚榮の父とみるにはそこに幾多の不自然なる點の存する事は池内博士の所說の如し、この點を落着させぬ限り父子說の成立は困難である。金氏は此の點に就ては論する所がない。次に建國者の出自である。金氏は長編叢考に於て種々と考察の過程を述べて居るが結局は「靺鞨

粟末部人」と「或云高麗別種」といふ兩說を並べるより外なかつた。鳥山氏は新舊兩唐書の記載を落着かせて主權者たる大氏は高麗人、渤海王國を組成せる主力は靺鞨であつたと考へて居る(渤海史考)。更に白鳥博士は昨秋「渤海國に就いて」と題する講演に於て大祚榮は舊唐書に云ふ通り高句麗人で王朝並びに上流社會を組織した者は高句麗人で被治者は靺鞨、乞乞仲象は靺鞨の酋長と思はれるといふ意味のことを種々證據を擧げていつて居る(史學雜誌第四十四編第十二號叢報所載)。その論證の方法は我々に一つの該問題解決の新しい指針を與へしものと考へる。次に論議されるのは五京の比定である。上京西京は定説あり、異說紛々たる中京顯德府に就ては金氏が我が小川博士、鳥山氏と同じく樺甸縣の靈密城說を採つてゐるが、鳥山氏がこの中京の地を舊國即ち大祚榮建國當初の根據地と同様に解して居るのには賛成せず舊國と中京とは決して一地に非ずと斷言し舊國を別地に求め(卷十四地理六葉)今の放東城附近に比定し(同上三十七葉)鄂多理城を除いて他に之に當るべき城基なし(同上四十一葉)といつてゐる。津田博士は舊國を敦化の附近として居るから金氏の說は之と一致する譯であるが津田博士は中京をもこの地に求める點が異つて居る。我國學者中舊國と中京を別地に考へし人は無い様であるから金氏のこの說は注目されるべきである。東京龍原府は我が松井、鳥山兩氏と同じく瑯春濱海の地に比定し瑯春境内の八連城がそれであらうかといつて居る(同上九葉)。然しこの地が濊貊の故地であるといふ記事の解

釋は鳥山氏の苦勞せるに比してや、疏略ではなからうか。南京南海府、これに就ては松井、鳥山兩氏と同じく咸鏡北道鏡城灣を「似可假定在此」(同上十二葉)といつたり、又朝鮮北青郡新昌(鏡城の南)がそれかも知れぬ(同上十二十三葉)といつたり、又東國輿地勝覽五十所載咸鏡北道鍾城府之古跡に南京と稱する處あり或はこれであらうか(同上十三葉)など頗る氣が多い。因みに最後の説は我が内藤博士が日本滿洲交通略説(叡山講演集)の中に既に説かれた所である。然るに以上諸京の比定の如きは文献に就て如何に考究するも所謂机上の空論に過ぎざる事が多い、かゝる問題は實地踏査の結果と相俟つて正鵠を期するに庶幾らう。

以上が金氏の論說の一斑である。然しこの書の特徴は論說よりも寧ろその史料集たる點に在る。史料集として本編は完璧に近い。非常に便利な本であることを申添へて諸士に御薦めする次第である。(大連右文閣發行、一帙十本價八圓)(外山)

●Peter Rassow; Die Kaiser-Idee Karls V.

dargestellt an der Politik der Jahre 1528-40.
(Historische Studien 217.)

フリードリッヒ、マイネツケにデタイケイトされたる本書は著者の序文によれば中世的皇帝問題への一審與として書かれたものである。一五二八—四〇年に限つたのは一五二八年の皇帝計畫に始まり、一五三八年 Nice, Aiguesortes に於けるフラン

ソワ一世との和解に至る期間に皇帝の理想が最も純粹に、かつ最も有効に實現せられたといふ著者の見解によつたためである。アウクスブルク帝國議會(第二章、一五三二年のトルコ遠征(第三章)、フランスとの Entente (第四章)、一五三六年復活祭月曜日カール五世のローマに於ける祝賀演説(第五章)が、かゝる實現への階段をなしてゐる。著者が個々の事實の敘述を精神的意味附けと結びつけてゐる點は秀れてゐる。

事實敘述の部分は特に成功してゐる。史料、文獻の選擇及び價は誠に適切であり、重要なものとしからざるものとの區別も正確である。無味乾燥なる公文書史料も色彩と生命とを得てゐる。一五三三—三四年のフランスに對する親善政策はフランソワ一世と Entente への最初の眞面目なる試みであると理解してゐる。亦多くの挿話的部分は例へばプロヴァンスへの遠征(一五三六年)の敘述の如く全體の敘述を生かしてゐる。

著者の見解によれば、この時代に於てはカール五世の中世的宗教的、世界的なる皇帝理念とフランソワ一世の近世國家理念とが對立し、兩者の間にクレンヌ七世及びパウル三世等ルネサンス法王の römische Prinzip が存したとする。この理念の對立は絶對的である。最初皇帝にはその反對者の政治原則に關する理解は少しもなかつた、彼はフランス王及び現實主義的政策を主張する彼の臣下とは別の立場に立つてゐた。彼は自らの基督教的形式學(sociologie)によつて時代の敵となつた(s. 210)。かゝる傳統的皇帝理念が全くカールの世界政策的任務を決定し